

杜甫「兵車行」と古樂府

長谷部 剛

(一) 導入

現存する杜甫の詩文集のなかで、續古逸叢書本『宋本杜工部集』は、北宋の「王洙・王琪本」の原貌を残す極めて貴重なテキストである。杜甫前半期の代表的作品である「兵車行」は卷一に收められ、その題下には雙行の夾注が以下のごとく記されている。

古樂府云、不聞耶娘哭子聲、但聞黃河流水一濺濺。

古樂府に云う、「耶娘が子との別れに泣く聲は聞こえず、ただ黃河の水がひたすらしぶきを上げて流れて行く音を聞くばかり」と。

『宋本杜工部集』は基本的には本文のみの無注本の體裁を取っており、雙行の夾注として記される數多くの注文は文字の異同を記したものを除くとすべて杜甫の自注のように見える。しかしながら、或る部分には後人が付加したと明らかに判断されるものも混入しており、夾注が果たして杜甫の自注なのかそうでないのか峻別する必要がある。

杜甫「兵車行」と古樂府

本稿はまず、この「古樂府云、……」が杜甫の自注か否かについて檢證し、續けてこの「古樂府」の由来について檢討を加えたい。

(二) 『宋本杜工部集』の夾注について

『宋本杜工部集』は二種類の杜甫の詩文集（第一本と第二本）をつなぎあわせて一本としたものである（表）参照。「兵車行」を収める卷一は、二種類の杜集のうち、第一本の「王洙・王琪本」の系統に屬する。

「王洙・王琪本」とは、北宋、寶元二年（一〇三九）に王洙が編集した『杜工部集』二十卷を、北宋、嘉祐四年（一〇五九）に王琪がさらに校訂した上で刊行した本。現在、この本の完本は傳わらず、この『宋本杜工部集』第一本もまた「王洙・王琪本」そのものではなく、南宋の紹興年間に浙江で重刻されたものと考證されている。

第二本（吳若本系統）は、王安石・黃庭堅・蘇軾など北宋人の評語を記載するなど、夾注に杜甫の自注ではないものが混入していることを容易に看取できる。

では、第一本（王洙・王琪本系統）はどうであろうか。

〔表〕『宋本杜工部集』（宋：宋刻部分／影：影寫部分）

卷數→	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮	⑯	⑰	⑱	⑳	補遺	
第一本「王洙・王琪本」系	影	影	影	影	影	影	影	影	影						影	影	宋	宋	宋	宋	宋
第二本「吳若本」系										宋	宋	宋	影	影							

卷①
 第1-2葉：北京圖書館藏本より補った部分
 第3-5葉：宋刻第一本
 第6-24葉：宋刻の王洙本を毛晉が劉臣に影寫させ、
 ↑ それを毛辰が王爲玉に影寫させた部分。
 「兵車行」は第8葉

〔その他〕
 [i] 卷⑫の第21葉後半是北京圖書館藏本より補った部分。
 [ii] 卷⑬の第1-2葉は北京圖書館藏本より補った部分。
 [iii] 補遺の第7-8葉は北京圖書館藏本より補った部分。
 [iv] 卷⑬⑭は毛辰が王爲玉に影寫させた部分であるが、第二本に相當する。

謝思煒「『宋本杜工部集』注文考辨」^⑤は、この問題について総合的・全體的に考證した、管見の限りでは唯一の研究である。謝論文はまず第一本夾注の内容を以下のように分類する。

- ① 制作時期の注記
- ② 詩と關係のある人物・事件の注記（杜甫本人の行動・交友の注記、及び時事の注記を含む）
- ③ 當時當地の特殊な風俗・呼稱の注記
- ④ 詩語の典故の注記
- ⑤ 或る字の方言音あるいは特殊な讀音の注記

そして、考證の結果、「第一本（王洙・王琪本）系統」の夾注はすべて杜甫の自注と考えられる「旨の見解を提出する。謝論文の見解に従えば、『宋本杜工部集』の夾注は、第二本には後人が付加したものが含まれるものの、第一本にはそれが無く、すべて杜甫の自注ということになる。

「兵車行」は第一本の「王洙・王琪本」の系統に屬するから、その題下の夾注「古樂府云、……」もまた杜甫の自注ということになる。そして、謝論文の分類の④「詩語の典故の注記」に屬すると考えられよう（後述）。

ただし、正確に言えば、「兵車行」が含まれる卷一の第六葉以下は宋刻ではない（「兵車行」は第八葉）。この本の所有者であった毛辰が、宋刻の王洙本『杜工部集』の影寫本をさらに甥の王爲玉に影寫させ補った部分に相當する。

しかしながら、本稿では、『宋本杜工部集』卷一の第六葉以下も王

殊本の系統であるという點を考慮に入れて、「兵車行」の夾注「古樂府云、……」は杜甫の自注である蓋然性が極めて高い、と判断する。

この判断を補強するものとして『分門集註杜工部詩』がある。

『分門集註杜工部詩』卷十四には「兵車行」詩本文(第三句)「耶娘妻子走相送」の下に雙行の夾注として以下のごとくある。

彦輔曰、杜元注云、古樂府云、不聞耶娘哭子聲、但聞黃河之水
流澌澌。

「彦輔」は王得臣の字。北宋期、杜詩に注釋を加えた人物である。

王得臣は、「杜元注」すなわち杜甫の自注としてこの「古樂府云、……」を引用している。『宋本杜工部集』と、王得臣の語を引く『分門集註杜工部詩』では、兩者の間に文字の異同があるものの、「古樂府云、……」は同一の歌辭であると考えられる。王得臣が「杜元注」と明記している以上、「古樂府云、……」は杜甫の自注と確認される。

(三)「木蘭詩」

杜甫自注所引の「古樂府云、……」は、いったいどのような由來を持つものであるか。

現存する「古樂府」或いは「樂府古辭」——ともに作者名の明らかでない古い樂府詩を指して言う——のなかに、この「古樂府」そのままの句は見當らない。

この「古樂府」との關連性が指摘されるものに「木蘭詩」がある。

「木蘭詩」は全六十二句からなる物語詩で、「木蘭」という名の女性が年老いた父に代わり男装して出征し軍功を擧げて凱旋したという内

杜甫「兵車行」と古樂府

容を持つ。廣く人口に膾炙した名詩であり、漢魏六朝詩歌のアンソロジーでは必ずといっていいほど採録される。そしてその際、「北朝の歌謠で作者不詳」とされることが多い。

「木蘭詩」の第二十三・四句は、杜甫「兵車行」自注「古樂府」と極めてよく似ている。

不聞爺孃喚女聲、但聞黃河流水鳴澌澌。

爺孃おやばあが女を呼ぶ聲は聞こえず、ただ黃河の流れが水しぶきの音を鳴らすのを聞くばかり。

これについて、蕭滌非「從杜甫・白居易・元稹詩看『木蘭詩』的時代」は、杜甫「兵車行」自注で引用されているのは「木蘭詩」であると指摘する。すなわち、蕭滌非論文は「古樂府」が「木蘭詩」であることを主張しているのである。古くは北宋期、黃庭堅によって同様の言及がなされている。

「木蘭詩」が北朝の歌謠とする前提に立てば、確かに、漢魏六朝の樂府歌謠を自己の詩歌創作に活用することの多かった杜甫が「木蘭詩」についても自作の「兵車行」に採り入れた、とも考えられる。蕭滌非論文の主旨もまた、「木蘭詩」が北朝の歌謠であるとの前提に立っている。

しかし、蕭滌非論文の見解は、特に以下の三點に即して再検討する必要があると考える。

一、「木蘭詩」の主人公は女性であり、だから「木蘭詩」第二十三句は「不聞爺孃喚女聲」となっている。杜甫の自注では「不聞耶

娘哭子聲」と、「女」ではなく「子」となっている。この違いはなぜ生まれたのか。

二、杜甫は自注でなぜ「木蘭詩」でなく「古樂府」と記したのか。

三、杜甫はなぜ自注「古樂府云、不聞耶娘哭子聲、但聞黃河流水一濺濺（あるいは「但聞黃河之水流濺濺」）を施したのか。

(四) 「木蘭詩」の形成

本節ではまず、杜甫自注「不聞耶娘哭子聲」と木蘭詩「不聞爺孃喚女聲」の異同の問題を、「木蘭詩」の形成との関わりから考えてみたい。

「木蘭詩」の成立年代については、上は漢代、下は唐代と、かねてより様々な説が提出されており、諸説紛々たる状況にある。「木蘭詩」は陳代の釋智匠『古今樂錄』に「木蘭、不知名」とあることから、杜甫が「兵車行」を製作した唐代より前にその歌辭が存在した可能性が極めて高い。また、内容的にも、詩中の地名が北魏・太武帝（四二三～四五二在位）における柔然征伐と合致することから、南北朝分裂期の北方を舞臺とすることもすでに指摘されている。ところが、現在目にするところができる「木蘭詩」歌辭全文は、〔注〕(9)に列擧するようにな、「古文苑」・『樂府詩集』・『文苑英華』など宋代になって始めて著録されているのである。現行の「木蘭詩」と同一のテキストを果たして杜甫が目にしたかどうか、確證はないのである。

「木蘭詩」のごとき作者不詳の物語詩は、「焦仲卿妻（孔雀東南飛）」と同じく、長期間の口承傳承と廣範圍の流傳を経て最終的には文人に

よって寫定されたものであり、その過程で多くの改作や増補が行われている、と考えるのが最も現實に近いであろう。「木蘭詩」冒頭の第一～六句は「木蘭詩」の形成過程を最も具體的に示している點で注目に値する。この部分は「折楊柳枝歌」の歌辭を採り入れたと考えられる。

以下に「木蘭詩」と「折楊柳枝歌」の當該部分を示す。

「木蘭詩」

- 1 唧唧復唧唧
- 2 木蘭當戶織
- 3 不聞機杼聲
- 4 唯聞女歎息
- 5 問女何所思
- 6 問女何所憶
- 7 女亦無所思
- 8 女亦無所憶
- 9 昨夜見軍帖
- 10 可汗大點兵

「折楊柳枝歌」(全四首)

第二首

- 1 門前一株棗
- 2 歲歲不知老
- 3 阿婆不嫁女
- 4 那得孫兒抱

第三首

- 5 救救何力力
- 6 女子臨窗織
- 7 不聞機杼聲
- 8 只聞女歎息

第四首

- 9 問女何所思
 - 10 問女何所憶
 - 11 阿婆許嫁女
 - 12 今年無消息
- 門の前に一本の棗の木があり、毎年（實をつけ）老いることを

11 軍書十二卷

12 卷卷有翁名

13 阿爺無大兒

14 木蘭無長兄

はあとため息をつき、そしてまたため息、木蘭は戸口に向かって機織りをして、いる。機の音は聞こえず、ただ彼女のため息を聞くばかり。「娘さん、お尋ねしますが、いったい何を思っているのですか」「娘さん、お尋ねしますが、いったい何を思っているのですか」「私は何を思うのでも、何を思い出すのでもありません。昨夜、徴兵名簿を見たら、國王は大いに兵を召し出され、名簿十一卷には、どの巻にもお父さんの名前がありました。お父さんには代わりに兵隊になる長男がいません。私には兄がないのです。」

杜甫「兵車行」と古樂府

しらない。お母さん、娘を嫁がせなかったら、どうして孫を抱くことができようか。

はあとため息をつき、女が窓に向かって機織りをしている。機の音は聞こえず、ただ彼女のため息を聞くばかり。

「娘さん、お尋ねしますが、いったい何を思っているのですか」「娘さん、お尋ねしますが、いったい何を思っているのですか」「お母さんは私が嫁ぐことを許してくれましたが、今年になって先方から何の知らせもありません」

「折楊柳枝歌」は、『樂府詩集』卷二十五「橫吹曲辭」五「梁鼓角橫吹曲」に收められ、五言四句を一首とし全四首から成る。第二首以下は一續きの内容と考えられる。

「木蘭詩」第三、六句は「折楊柳枝歌」第七、十句とほぼ同じ表現である。問題となるのは、「木蘭詩」第一、二句である。第一句「唧唧復唧唧」及び「折楊柳枝歌」第五句「敕敕何力力」は、ともに詩中の主人公が嘆息するさまを表現するものである。第二句については、「當戶織」が「折楊柳枝歌」第六句の「臨窗織」とほぼ同じ動作を表現するものであり、異なるのは、その動作の主體が「木蘭」という固有名詞になっている点だけである。

すなわち、「木蘭詩」の第一、六句は、「折楊柳枝歌」五、十句の表現をほぼそのまま借用し、詩中の主人公を「女子」から固有名詞「木蘭」に入れ替えただけなのである。それによって、詩中の主人公は、嫁ぎ先のないことを嘆く「女子」から、家に成人の男子無く年老いた父が出征しなければならぬことを嘆く「木蘭」へと置き換えられたのである。

「木蘭詩」が既成の歌辭を自らのなかに取り入れたと考えられる箇所は、右の第一、六句だけではない。他にも複数の箇所が既成の歌辭を自らのなかに取り入れたと考えられることが先行研究によって指摘されている。つまり、現行の「木蘭詩」は、或る一定の時期に或る特定の個人によって創作されたのではなく、長期間の口承傳承と廣範圍の流傳の過程で、既成の歌辭を自らのなかに取り入れるなど、多くの改作や増補が行われて「形成」されたものである。

これと同じことが、「木蘭詩」第三、四句「不聞爺孃喚女聲、但聞黃河流水鳴濺濺」と杜甫「兵車行」の自注「古樂府云、……」にも

當てはまる。

「木蘭詩」

「兵車行」自注所引「古樂府」

23 不聞爺孃喚女聲

不聞耶娘喚子聲

24 但聞黃河流水鳴濺濺

但聞黃河流水一濺濺

(但聞黃河之水流濺濺)

ここで注目すべきは、「木蘭詩」の「喚女」と、「兵車行」自注所引「古樂府」の「哭子」との異同である。「木蘭詩」は「古樂府」の「哭子」を「喚女」に入れ替えることによって、「爺孃が女を呼ぶ聲は聞こえない」という意に變え、「木蘭」物語の文脈に適合させたものと考えられる。

このように、「木蘭詩」は、「折楊柳枝歌」や、「兵車行」自注所引「古樂府」など、既成の歌辭を自らのなかに取り入れて形成しているものと考えられる。この立場に立てば、「兵車行」自注で引用されている「古樂府」が「木蘭詩」であるとすると蕭滌非論文の見解は否定されることになる。

(五) 杜甫「兵車行」と先行作品

本節では、「杜甫は自注でなぜ『木蘭詩』でなく『古樂府』と記したのか」という問題について、杜甫「兵車行」と先行作品との關わりから考えてみたい。

唐・玄宗の天寶十載(七五一)、鮮于仲通が南詔を討ち士卒の死者は六萬を數えた。楊國忠はこの失敗を糊塗すべく新たな征伐を舉行し

ようとして、長安・洛陽の兩京、および河南・河北で兵を募つたものの、それに應ずる者はいなかった。楊國忠は御史を遣わし、道で人を捕らえては強制的に兵士とした。兵士たちは恨みを抱きつつ出征し、それを見送る家族の哭聲は至るところで野をふるわせたという(『資治通鑑』卷二一六による)。

杜甫がこの事實に即して詩を作るとき、彼は「……行」という漢代樂府の立題方法を踏襲して「兵車行」と新しく題を立てた。「兵車行」は漢代樂府の立題方法を踏襲する以上、漢代樂府の發想や表現を強く意識して製作されている。さらには、『詩經』⁽²⁾、そして、漢代樂府を模擬するかたちで製作された陳琳「飲馬長城窟行」⁽³⁾をも踏まえる。このことは多くの論者によってすでに指摘されていたことである。

しかし、改めて先行作品との關係を調査してみると、杜甫「兵車行」は、『詩經』・漢代樂府・陳琳詩だけでなく、「紫駟馬歌辭」・「企喻歌」など、『樂府詩集』に「梁鼓角橫吹曲」として收められる歌辭群とも密接な關係を持つことが判明した。これは、宋代以來の杜詩解釋史・研究史のなかでもあまり注視されていなかったことである。まず、「兵車行」と「紫駟馬歌辭」の當該部分を示す。

「兵車行」

- 7 道傍過者問行人
- 8 行人但云點行頻
- 9 或從十五北防河
- 10 便至四十西營田

「紫駟馬歌辭」(全八首)

第三首

- 1 十五從軍征
- 2 八十始得歸
- 3 道逢鄉里人
- 4 家中有阿誰

11 去時里正與裏頭

12 歸來頭白還成邊

道の傍らを通り過ぎる者

が兵士に尋ねる。兵士はた
だ言う、「頻りに徴兵があ
るのです」と。或る者は、

十五の年から北で黄河の守
りにつき、そのまま四十歳

となつてもまだ西で屯田兵
となつてゐる。出征の時、

里長が彼に頭巾をつけてあ
げたのだが、故郷に歸る時

には頭はまっ白で、それで

もまた邊境の守りにつかな
ければならない。

十五の年で從軍し、八十歳に
なつてやつと故郷に歸つてきた。

道で故郷の人に會い、「私の家
には誰が暮らしていますか」と

尋ねる。

(第四首以下は〔注〕(30)に
掲げた)

「兵車行」

31 君不見 青海頭

32 古來白骨無人收

ご覧なさい、青海のほと
りでは、(戦場で野ざらし

になつた) 白骨を拾う人も
いない。

「企喻歌」(全四首)

第四首

1 男兒可憐蟲

2 出門懷死憂

3 尸喪狹谷中

4 白骨無人收

男は本當にあわれな蟲けら。
一たび我家の門を出れば、いつ

死ぬかもしれない憂いを抱いて
いる。(死んだら) 遺骸は狹谷

の中に葬られ、(やがて) 白骨

(となり、それ) を拾う人もい
ない。

右下に掲げた「紫駟馬歌辭」は、「梁鼓角横吹曲」に收められる。五言
四句を一首として計六首から成り、第三首以下の十六句は一續き

の内容となつてゐる。

十五歳で徴兵された兵士が年老いて歸郷する、という場面設定、そ

して、兵士と道行く者との問答體、という二つの點からみて、「兵車
行」は、「梁鼓角横吹曲・紫駟馬歌辭」第三首を踏まえることは明白

であろう。
次に、「兵車行」と「企喻歌」の當該部分を示す。

右下に掲げた「企喻歌」は、「梁鼓角横吹曲」に收められる。五言
四句を一首として計四首からなる。「兵車行」第三十二句「古來白骨

無人收」が、「企喻歌」第四首の第四句「白骨無人收」を踏まえるこ
とは明白であろう。

このように、杜甫「兵車行」は、「梁鼓角横吹曲」と密接な關係持
つことが確認される。

そして、注目すべきは「紫駟馬歌辭」・「企喻歌」についての『樂府
詩集』の解題である。まず、「紫駟馬歌辭」。

「紫駟馬歌辭」解題：

『古今樂錄』曰、「『十五從軍征』以下是古詩。」

『樂府詩集』は「紫駟馬歌辭」について『古今樂錄』を引用する。『古今樂錄』は、「紫駟馬歌辭」第三首（十五從軍征）以下が「古詩」であると言ふ。

次に「企喻歌」。

「企喻歌」解題：

『古今樂錄』曰、「（…省略…）最後『男兒可憐蟲』一曲是符融詩、本云『深山解谷口、把骨無人收』」。

「企喻歌」についても『古今樂錄』が引用される。「企喻歌」第四首が符融の詩と言ふ^②。そしてさらに、

深山解谷口、把骨無人收

奥深い山は谷川の入り口で二つに分かれ、そこに散らばる白骨を拾う人もない。

という、「企喻歌」が基づく表現があることが指摘されている。この「把骨無人收」については中華書局編輯部點校本『樂府詩集』に「把、當作白」と校語が記されるので、本稿でも以下は「白骨無人收」とする。

ところで、この二つの現象はいったい何を意味しているのであろうか。次節で検討したい。

（六）「梁鼓角横吹曲」と「古樂府」

「梁鼓角横吹曲」について、『樂府詩集』は『古今樂錄』有「梁鼓

角横吹曲」、多岐慕容垂及姚泓時戰陣之事（卷二十一「横吹曲辭」一解題）と述べる。歌辭の多くが、後燕の慕容垂や後秦の姚泓の時代、北方が北魏によって統一される以前の戰亂の時代（五胡十六國の時代）を背景としている、との指摘である。「梁鼓角横吹曲」が北方を舞臺としながらも、南朝「梁」の字を含むのは、これらが北方から南方に傳わり記録されたためである^③。

「梁鼓角横吹曲」には、五胡十六國の時代よりも早期のものと思われる歌辭が混入している。『古今樂錄』で「古詩」とされる、「紫駟馬歌辭」第三首（十五從軍征）以下もその一例である。「十五從軍征」は以前より樂府研究者の注目するところであった。例えば、清代の朱乾『樂府正義』は、この「十五從軍征」は漢代の相和曲「十五」の古辭と推測する^④。

次に、「企喻歌」第四首については、その表現が基づくまた別の表現（「深山解谷口、白骨無人收」）が『古今樂錄』に記録されている。つまり、「白骨無人收」は、「梁鼓角横吹曲」の範疇には屬さない、それよりも古い表現だったのである。

杜甫「兵車行」は「梁鼓角横吹曲」と密接な關係を持つ。しかしながら、「十五從軍征」は「古詩」であること、「企喻歌」にはそれに先立つ「白骨無人收」という古い表現が存在すること、この二點から考えると、杜甫は「梁鼓角横吹曲」そのものを典據としたのではなく、「梁鼓角横吹曲」に採り入れられる以前の「十五從軍征」・「白骨無人收」を典據としたのではないか、と推測される。

杜甫の自注「古樂府云、不聞耶娘哭子聲、但聞黃河流水一濺濺」は、「十五從軍征」・「白骨無人收」と關連づけて考察すべきである。

「古樂府」の「不聞耶娘哭子聲」は、おそらく、出征する息子を父

母が泣きながら見送る場面を詠じたものであろう。「十五從軍征」・「白骨無人收」と同じく戦亂の時代を背景として作られたものと推測される。

後漢末以來、中國では戦亂が續き、それを背景として多くの戦亂詩及び離別詩が作られた。陳琳「飲馬長城窟行」や王粲「七哀詩」など、建安七子の作品はその代表的なものであり、兩詩の存在からも、當時、戦亂は詩歌の主題として重要な位置を占めていたことがわかる。「十五從軍征」以下十六句からなる物語詩や、「深山解谷口、白骨無人收」、そして杜甫自注所引の「古樂府」もまた、その内容からみて、具體的な成立時期・背景までは特定できないが、おそらくは後漢末より始まり、三國分裂、西晉の滅亡など、止むことなく續いた戦亂を背景として作られた歌辭、あるいは歌辭の斷片であらう。

ここで、第三節で提出した「杜甫は自注でなぜ『木蘭詩』でなく『古樂府』と記したのか」という問題を想起されたい。以上の検討を經れば、杜甫がなぜ「木蘭詩」ではなく「古樂府」と記したのか、理解できよう。杜甫が自注で引用した「古樂府」は「木蘭詩」ではなく、やはり「古樂府」である。換言すれば、「古樂府」と題するものに收斂される歌辭、と判断されるのである。

(七) 古樂府

では、この「古樂府」は、具體的に如何なるものを指しているのであらうか。

顯慶元年(六五六)に完成した『隋書』の「經籍志」には『古樂府』なる一巻の書が著録されている。また、吳兢(六七〇〜七四九)が『古樂府』なる十巻の書を編纂していたことが、晁公武『郡齋讀書志』

杜甫「兵車行」と古樂府

に記されている。この二種の『古樂府』はすでに佚書となっている。

だが、虞世南(五五八〜六三八)『北堂書鈔』・歐陽詢(五五七〜六四一)『藝文類聚』・李善(六一〇頃〜六九〇)の『文選』注などには、「古樂府……」と引用される例が散見する。それらによって、初唐期において「古樂府」と稱されるものが如何なるものであったのか、概観することができる。「文選」李善注には引書索引がある⁽³⁾ので、李善注に引用される「古樂府」が如何なるものであるのか通覽してみたい。

『文選』李善注

〔i〕卷十四 鮑照「舞鶴賦」(「雖邯鄲其敢倫」句の李善注)

：古樂府曰、黃金爲君門、白璧爲君室、上有雙樽酒、使作邯鄲倡。

(↑「相逢狹路間」古辭の第七〜十句)〔玉臺新詠〕卷一所收)

〔ii〕卷十六 潘岳「懷舊賦」(「墳壘壘而接壘」句の李善注)

：古樂府詩曰、還望故鄉、鬱何壘壘。

(↑魏文帝「善哉行」第七〜八句)〔文選〕卷二十七所收)

〔iii〕卷十六 潘岳「河陽縣作二首」其一(「頰如槁石火、瞥若截道麤」句の李善注)

：古樂府詩曰、鑿石見火能幾時。

(↑佚詩)

〔iv〕卷三十 謝朓「和王主簿怨情」(「相逢詠髮蕪」句の李善注)

：古樂府詩曰、上山採藤蕪、下山逢故夫。

(↑「古詩八首」其一「上山採藤蕪」)〔玉臺新詠〕卷一所收)

〔v〕卷二十 王粲「公讎詩」(「今日不極權、含情欲待誰」句の李善注)

：古樂府歌曰、今日尙不樂、當復待何時。

善注)

：古樂府歌曰、今日尙不樂、當復待何時。

(↑佚詩。似た表現が「西門行」に「今日不作樂、當待何時」とある『樂府詩集』卷二十七所收)

「vi」卷二十九 「古詩十九首」其一 (相去日已遠、衣帶日已緩) 句の李善注)

：古樂府歌曰、離家日越遠、衣帶日越緩。

(↑「古歌」〔明〕馮惟訥「輯」『古詩紀』卷七所收)

「vii」卷三十 沈約「三月三日率爾成篇」(『金瓶汎羽卮』句の李善注)

：古樂府詞曰、金瓶素綆汲寒漿。

(↑「拂舞歌詩五篇」其五「淮南王篇」(『宋書』卷二十二「樂志」四所收)

(他に、李善注には「古樂府日出東南隅行」などの引用もあるが、省略)

注目すべきは「iii」・「v」・「vi」である。これらは、樂府題が失われて『文選李善注』に断片的にしか残っていない歌辭である。おそらく初唐期には『古樂府』と題する書が存在し、李善は『文選』注を撰する際にはそれを利用したのであろう。

杜甫自注所引「古樂府」もまた「iii」・「v」・「vi」と同類と考えられる。杜甫が「兵車行」を制作した盛唐期にも、後漢末以來の戦亂のなかで生まれた歌辭は複数が残存していたに違いない。それが、杜甫自注所引「古樂府」、そして、「十五從軍征」以下十八句からなる物語詩、「深山解谷口、白骨無人收」であると判断されるのである。

その後、杜甫のころには保存されていた歌辭群は多くが散佚した。しかし、「古樂府」云、不聞耶娘哭子聲、但聞黃河流水一濺濺」につい

ては、杜甫が自注として書き記したので、樂府題も失われ、しかも断片としてではあるが、『宋本杜工部集』によって現在まで伝えられることとなった、と考えられる。また、「十五從軍征」・「深山解谷口、白骨無人收」については、釋智匠『古今樂錄』に記録されたために『樂府詩集』の「梁鼓角横吹曲」のなかに留められることになった、と考えられる。

(八) 杜甫「兵車行」制作の意圖

最後に、第三節で提出した三について考察する。杜甫はなぜ「古樂府」云、……」なる自注を施したのであろうか。これは「兵車行」制作の意圖とも關わる重要な問題である。

まず考えられるのは、「兵車行」第三句「耶娘妻子走相送」の「耶娘」について典據を示した、ということである。すなわち、白話的(口語的・俗語的)色彩を濃厚に持つ「耶娘」が實は「古樂府」にも用いられた來歴のある語であることを杜甫自ら辨明した、と考えられるのである。

「兵車行」は、通説では天寶十年(七五二)、杜甫四十歳の作と編年される。この時期、杜甫は都長安にあって困窮していた。天寶六年に元結らとともに應じた制科を李林甫によって落されて以來、無位無官の彼は貴顯の邸宅に出入し詩を奉贈しては高位高官に引き立てられることを願った。「兵車行」はこのような仕官運動期の作品である。したがって、出征兵士の勞苦を詠った「兵車行」もまた、諷諭詩を製作することによって貴顯・文人に認められ、それを仕官の手掛かりとしようとする意圖から製作されたものと判断される。であるからこそ、「兵車行」中に白話的色彩を濃厚に持つ「耶娘」を敢えて用いること

に對しては、「古樂府」という古典に據りどころを求めた旨の説明が必要であつたと考えられる。「耶娘」の使用という「冒險」に杜甫は「古樂府」という「保證」を用意していたのである。

そしてさらに注目すべきは、『宋本杜工部集』では、「古樂府」云……なる自注が詩題「兵車行」の下に、すなわち「題下注」として、記されていることである。通常、題下注は詩の主題の提示、あるいは製作動機・意圖の表明として機能する。白居易の「新樂府」諸篇の題下注——例えば第九首「新豐折臂翁 戒邊功也」——を想起すればその機能は容易に理解されよう。

第六節で示したように、「古樂府」云、不聞耶娘哭子聲、但聞黃河流水一濺濺」は、出征する息子を父母が泣きながら見送る場面を詠じたものと推測される。止むことない戦争が一般人民を塗炭の苦しみに陥れているさまが看取できる歌辭である。「兵車行」は、その詩全篇の内容からみて、杜甫自身が知り得た時事問題に沿うかたちでこの「古樂府」を敷衍させたものと考えられるのである。つまり、「古樂府」云……」は「兵車行」を貫通する主題として機能していると判断される。杜甫「兵車行」はこの「古樂府」に基づいて制作されたのである。

杜甫「兵車行」は新しく題を立てて製作された「新題樂府」である。古樂府の題をそのまま踏襲した「擬古樂府」ではない。しかし、「……行」という漢代樂府の立題方法を踏襲している以上、そこに漢代樂府の精神や傳統を繼承しようとする意圖があることは確かであろう。また、詩中第十四句に「武皇開邊意未已」・第十五句に「君不聞漢家山東二百州」とあるごとく、「兵車行」は時代を漢代に假託している。この二點、漢代樂府の繼承、時代を漢代に假託、を讀者に理解させる上でも、自注「古樂府」は有効に機能していると言えよう。

杜甫「兵車行」と古樂府

(九) 小結

「兵車行」は杜甫を社會詩人として位置づける意味でも、彼の前半期の代表的作品と言える。それに伴って従來數多くの論者によって様々な言及が爲されてきた。杜甫の批判精神、「詩史」としての史實との對應關係、『詩經』・漢代樂府・陳琳「飲馬長城窟行」といった先行作品との關わり、元稹・白居易らの「新樂府」への影響、など。

その一方で、自注「古樂府」及び「十五從軍征」・「白骨無人收」については、この三者の關連性と重要性が従來論じられることはなかった。今回の検討を経て、現在では由來不詳となつてゐる古い歌辭群が、「古樂府」として、杜甫「兵車行」の主題や表現に決定的な影響を與えていることが明らかになつた。

しかしながら、初唐・盛唐期に「古樂府」なるものがどのように存在していたのか、また、どのように位置づけられていたのか、まだ不明な點も多い。初唐・盛唐期における「古樂府」の實態が判明しなければ、元稹・白居易ら「新樂府」の本質的な解明も不可能であろう。今後の課題としたい。

(注)

(1) 『宋本杜工部集』とは、上海圖書館藏本『杜工部集』を續古逸叢書第四十七種として影印したもの(縮刷本が一九九四年に江蘇廣陵古籍刻印社より出版されている)。

(2) 『宋本杜工部集』の張元濟「杜集跋」に據る。さらに詳しくは、長谷部剛『宋本杜工部集』をめぐる諸問題——附、『錢注杜詩』と吳若本について(『中國詩文論叢』第十六集、一九九七年)を参照されたい。

- (3) 「吳若本」とは、南宋、紹興三年(一一三三)に吳若が建康の府學で刻行した杜集。現在「吳若本」の完本は傳わらず、『宋本杜工部集』第一本もまた「吳若本」のものではなく、「吳若本」より後に刻行されたテキストと考證されている。詳しくは(注)(2)所掲の長谷部論文を参照されたい。

- (4) 例えば、

〔i〕『宋本杜工部集』卷十一「蜀相」

：介甫云、「映堦隔葉」一聯、非止詠孔明而託意在其中。(「介甫」は王安石の字)

〔ii〕卷十一「南鄭」

：魯直作艇、航方舟也。(魯直)は黃庭堅の字)

〔iii〕卷十二「江畔獨步尋花七絕句」其六

：東坡云嘗云、齊魯大臣一人而史失其名。「黃四娘」何人、乃託杜詩而不可也、世間幸不幸、類如此。

- (5) 『唐宋詩學論集』所收、商務印書館、二〇〇三年。初出：一九八四年。

- (6) 『宋本杜工部集』所收の毛扆の跋文に據る。毛扆(一六四〇～一七一三)は清代の藏書家。父、毛晉の汲古閣を相續した。『宋本杜工部集』が上海圖書館に歸する以前に同書を所有していた。

「宋刻の王洙本『杜工部集』の影寫本」とは、毛扆の父、毛晉が、宋刻の王洙本『杜工部集』を劉臣なる者に影寫させた本のこと。

- (7) 撰者・編者・刻者ともに不明。南宋、寧宗期(一一九五～一二二四)の刊刻と推定される。『四部叢刊正編』所收。

- (8) 王得臣は『和註杜子美詩』四十九卷を撰した。同書は現在傳わらないが、自序が『分門集註杜工部詩』に收められる。自序は、北宋、政和三年(一一一三)の年號を記す。

- (9) 「木蘭詩」を収録する主要な總集は、下記の四種。

〔i〕「北宋」郭茂倩「編」『樂府詩集』卷二十五「橫吹曲辭」五「梁鼓角

橫吹曲。『樂府詩集』はこの「木蘭詩」を「木蘭詩」首「古辭」の第一首として載せる。中華書局、一九九一年。

〔ii〕『古文苑』卷九。『古文苑』は撰者不詳。唐代にすでに成立していたと傳えられるが、北宋人の偽編と疑われる(劉國進「中古文學文獻學」、江蘇古籍出版社、一九九七年)。今回は『四部叢刊正編』所收のテキスト(二十一卷本)に據った。『四部叢刊正編』所收のテキストは、「南宋」章樵が增補・注釋を加え、紹定五年(一二三三)の章樵の自序を冠するもの。

『古文苑』は「不聞爺嬾喚女聲」を「不聞耶嬾喚女聲」に作る。これについて、章樵は「耶、以遮切。今作爺、俗呼父爲爺」と注する。

〔iii〕「北宋」李昉ほか『文苑英華』卷三三三。今回は隆慶元年(一五六七)刻本の影印本に據った。隆慶本は『文苑英華』唯一の全本。なお、『文苑英華』は「木蘭詩」を韋元甫の作とする。

〔iv〕馮惟訥「古詩紀」卷九十六。嘉靖三十九年(一五六〇)序刊本(一九六一年京都大學中國語文研究室複製)。

- (10) 例えば、日本語版では、松枝茂夫『中國名詩選』中(岩波文庫、一九八四年)。現代中國語版では、王運熙・王國安『漢魏六朝樂府詩評注』(齊魯書社、二〇〇〇年)。

- (11) 『杜甫研究(修訂本)』所收、齊魯書社、一九八〇年。初出：一九五四年。

- (12) 他(引用者注、杜甫)自己注明用「木蘭詩」の一處、是他的「兵車行」。

- (13) 杜甫爲什麼稱「木蘭詩」爲「樂府」呢。這是因爲「木蘭詩」原是「梁鼓角橫吹曲」中的一曲、屬於樂府範疇。爲什麼又稱「古」呢。這就是說、他認爲「木蘭詩」是唐代以前的作品。

- (14) 黃庭堅(字は魯直)の指摘は、「南宋」趙次公の杜注に引用される。趙云、此詩直道其事、氣質類古樂府。故多使俗語。如「耶娘」字、

俗書作「爺嬾」、而此詩用「耶娘」字、蓋「木蘭歌」有「不聞耶娘喚女聲」。黃魯直「跋木蘭歌後」云、杜子美「兵車行」引此詩。推「耶娘」字所出、以知古人用字、其與俗書不同、皆有所本。(「南宋」郭知達「九家集注杜詩」卷一、「杜詩引得」排印本。これは「清嘉慶年間刻本を校點排印したもの。洪業ほか「杜詩引得」、上海古籍出版社、一九八五年)

(15) [注] (9) 所掲の劉驥進「中古文學文獻學」二五五～二五九頁において、「木蘭詩」の成立に關する從來の研究が要領よく整理されている。同書は諸説を、

- ・漢代創作説、・三國創作説、・北朝創作説、
 - ・南朝、初唐開寫定説、・隋代創作説、・唐代創作説、
- の六種類に整理する。

(16) 『古今樂錄』の「木蘭、不知名」は、『樂府詩集』卷二十五「木蘭詩」一首「古辭」の解題として引用される。

『古今樂錄』は、王應麟『玉海』卷一〇五「音樂」の項に『中興書目』、『古今樂錄』十三卷、陳廢帝光大二年、僧智匠撰、起漢迄陳」とあることから、陳、廢帝の光大二年(五六八)に成立したことがわかる。

(17) 余冠英『樂府詩選』、人民文學出版社、一九九七年。

(18) 曹道衡・沈玉成『南北朝文學史』(人民文學出版社、一九九一年)、及び曹道衡「關於樂府民歌的產生和寫定」(『漢魏六朝文學論文集』所收、廣西師範大學出版社、一九九九年)は、「木蘭詩」の成立・形成に關して、この立場をとる。

(19) [注] (9) [註] 所掲の『文苑英華』は「木蘭詩」第一句を「唧唧何力力」に作り、「折楊柳枝歌」との近似性はより高くなる。

(20) 「木蘭詩」のなかで既成の歌辭を自らのなかに取り入れたと指摘されるものには、以下のものがある。

- ・第三十一、四句「朔氣傳金柝、寒光照鐵衣、將軍百戰死、壯士十年歸」

杜甫「兵車行」と古樂府

は、措辭の彫琢、巧みな對句表現、などから、南朝梁陳以降の詩歌のスタイルであると考えられる([注] (18) 所掲『南北朝文學史』四六八頁の指摘)。

(21) 第五十九、六十、六十一句「雄兔脚撲朔、雌兔眼迷離、雙兔傍地走、安能辨我是雄雌」は、おそらく元來は別の歌謠であったと考えられる(『南北朝文學史』四六四頁の指摘)。

例えば、仇兆鰲「杜詩詳注」(中國古典文學基本叢書、中華書局、一九七九年)卷二は、「兵車行」が典故とする漢代樂府として左下のものを挙げる。

[i] 「兵車行」	7 道傍過者問行人	「相逢行」古辭
[ii] 「兵車行」	17 縱有健婦把鋤犁	18 觀者盈道傍
	18 天生隴敵無東西	「隴西行」古辭
[iii] 「兵車行」	34 天陰雨濕聲啾啾	31 健婦持門戶
	1 車麟麟	32 一勝一丈夫
馬蕭蕭		「雞鳴」古辭
[魏]陳琳「飲馬長城窟行」	「詩經」秦風「車鄰」	17 鳴聲何啾啾
「兵車行」	1 有車麟麟	「詩經」小雅「車攻」
	27 信知生男惡	1 蕭蕭馬鳴
	28 反是生女好	「飲馬長城窟行」陳琳
	29 生女猶是嫁比鄰	21 生男慎莫舉
	30 生男埋沒隨百草	22 生女甯用脯

陳琳の「飲馬長城窟行」は、右のように杜甫「兵車行」の典故となっている以外にも、勞役や兵役に驅りだされる民衆の嘆きを、役人との問答や夫婦間の手紙のかたちで表現していること、「君獨不見」という表現を用いること、などの二點から見ても、杜甫「兵車行」への強い影響が認められる。

(24) 杜甫「兵車行」が「十五從軍征」を踏まえることについては、近年まで指摘されることがなかった。

坂口三樹「古來 白骨人の收むる無し——杜甫「兵車行」」(月刊しにか)二〇〇三年六月號、大修館書店)が、

第九・十句の對句は、「紫騮馬歌辭」(宋・郭茂倩『樂府詩集』卷二 十五「梁鼓角橫吹曲」)に見える「十五にして軍に從いて征き、八十にして始めて歸るを得たり」の句に學んだものかと思われる。

と述べるのが、管見の限りでは兩者の關係について言及した唯一のものである。

また、「十五從軍征」より始まる、この物語詩については、杜甫「無家別」(「三吏三別」の一)がこの詩の影響を受けているとの指摘が、「注」(17)所掲の余冠英『樂府詩選』によってなされている。「無家別」の製作年代は「兵車行」より後であることから、「兵車行」で部分的にこの物語詩を用いた杜甫が、その後、この詩の主題や發想を詩全篇に用いたのが「無家別」である、と考えるべきであろう。

(25) このことについては、仇兆鰲「杜詩詳注」(注)(21)所掲)がすでに指摘している。

(26) 苻融(?—三八三)は前秦の皇帝苻堅の弟。肥水の戦いで戦死した。文武兼備であった。『晉書』卷一一四に傳がある。(注)(10)所掲の『漢魏六朝樂府詩評注』は、この詩が苻堅の作であるかは疑わしいと述べる。

(27) [注](9)所掲。

(28) 王運熙「梁鼓角橫吹曲雜談」參照。『樂府詩述論』所收、上海古籍出版社、一九九六年。初出：一九九五年。

(29) 詳しくは、王運熙「梁鼓角橫吹曲雜談」、及び以下の論考を參照されたい。

・松家裕子「梁の樂府と北方」、『興膳教授退官記念 中國文學論集』所收、汲古書院、二〇〇〇年。

・曹道衡「關於北朝樂府民歌」、『中古文學史論文集』所收、中華書局、一九八六年。

(30) 『清』朱乾『樂府正義』卷五「相和歌辭・相和・十五 魏文帝」の解題に下記のごとくある。

古辭有「十五從軍征」詩、疑即此「十五」、而魏文擬之也。(乾隆五十四年(一七八九)刊本影印本。京都大學漢籍善本叢書、同朋舍出版、一九八〇年)

『宋書』卷十九「樂志」一に「凡樂章古詞、今之存者、竝漢世街陌謠謳、『江南可采蓮』『烏生』『十五』『白頭吟』之屬、是也」とあり、漢代に「十五」なる樂府詩があったことがわかるが、『宋書』卷二十一「樂志」三「相和」は、魏文帝曹丕の歌詞を収めるのみである。

しかしながら、「十五從軍征」が果たして漢代の相和歌「十五」の古辭であるのか、という問題についてはさらなる檢證が必要である。例えば、『樂府詩集』は「十五從軍征」を「橫吹曲」に収める。漢代の「十五」は相和歌であるから、まずこの點で齟齬が見られる。朱乾の見解の適否については暫く措くこととする。

ところで、「十五從軍征」が樂府古辭である可能性を示すものとして、鮑照(代)東武吟(『文選』卷二十八所收)の存在がある。「十五從軍征」の發想や表現は、劉宗の鮑照の詩にも影響を与えていると考えられる。

「紫驢馬歌辭」

第二首

- 1 十五從軍征
- 2 八十始得歸
- 3 道逢鄉里人
- 4 家中有阿誰

第四首

- 5 遙看是君家
- 6 松柏冢累累
- 7 兔從狗竄入
- 8 雉從梁上飛

第五首

- 9 中庭生旅穀
- 10 井上生旅葵
- 11 春穀持作飯
- 12 採葵持作羹

第六首

- 13 羹飢一時熟
- 14 不知飴阿誰
- 15 出門東向看
- 16 淚落沾我衣

〔紫驢馬歌辭〕第三首通釋〕十五の年で從軍し、八十歳になつてやつと故郷に歸つてきた。道で故郷の人に會い、「私の家には誰が暮らしていますか」と尋ねる。(問われた人は答えた)「遠くに見えるのがあなたの家です。松柏の繁るお墓がたくさん連なっています」と。犬の出入り口に野ウサギが入りゆき、屋根の梁からキジが飛んできました。中庭には野生の穀物が生い茂り、井戸の上には野生の冬葵が生い茂る。その穀物を

杜甫「兵車行」と古樂府

〔代〕東武吟 鮑照

- ↓ 17 少壯辭家去
- ↓ 18 窮老還入門

年若きころに家を辭し、貧乏な老人になつて家に歸つてきた

- ↓ 20 倚杖牧雞豚

杖によりながら、鶏と豚を飼う。

- ↓ 19 腰鎌刈葵藿
- 鎌を腰に差して冬葵と藿を刈り、

曰でついでご飯を作り、その冬葵を摘んであつものを作った。あつものもご飯もすぐに煮上がったが、いったい誰に食べさせたらいいのだろう。門を出て東の方角を見ると、涙が流れて私の衣を濡らす。

(31) 「息子」としたのは、通常、出征するのは成人した男子であり、「子」は「息子」と解釋すべきだからである。

(32) 陳琳「飲馬長城窟行」は、舊來、秦の長城建築の苦勞をうたったものと理解されているが、この詩の主題が必ずしも秦の長城建築に限定されるものではないことが、副島一郎「孟姜女物語・陳琳「飲馬長城窟行」・長城詩」によつて指摘されている(注)(29)所掲『興膳教授退官記念中國文學論集』所收)。

(33) 『隋書』卷三十五「經籍志」四「集」總集。

興膳宏・川合康三『隋書經籍志詳攷』(汲古書院、一九九六年)は、この『古樂府』について「撰者未詳」とする。

(34) 富永一登『文選李善注引書索引』、研文出版、一九九六年。

(35) 胡克家の『重雕宋淳熙本李善注文選』、所謂「胡刻本」に據る。

(36) 横田輝俊「文選李善注所引古樂府攷考」(『支那學研究』特輯號、一九五四年)は、『文選』李善注所引「古樂府」の三字は書名であろうと推測する。

横田論文は、李善注に、「古樂府詩曰、……」、「古樂府歌曰、……」、「古樂府詞曰、……」と、「古樂府」の下に「詩」「歌」「詞」の字が記されていることについて、以下のように述べる。

「引用者注、書籍である」「古樂府」中における、かゝる區分を、そのまま襲用したものかと思はれる。

しかしながら、「詩」「歌」「詞」の區分については、「胡刻本」以外の李善注のテキスト(版本)では異同もあり、さらなる檢證が必要である。攷を俟つ。

(37) 「耶娘(爺孃)」は唐代においては白話的(口語的・俗語的)色彩を濃

厚に持つ語であったようである。なぜならば、文言系の文獻史料にその用例を見いだすことが甚だ困難だからである。唐代の用例として以下の二例を捜しえた。

〔一〕敦煌曲子詞「鶻踏枝」

：仰告三光垂淚滴、教他耶娘、甚處傳書覓。

〔五〕白居易「新樂府」第九首「新豐折臂翁 戒邊功也」

：村南村北哭聲哀、兒別爺娘夫別妻

次に、「耶娘（爺孃）」を切り離し、「耶（爺）」が「ちち」、「娘（孃）」が「はは」の意で用いられる用例として、檢索し得た限りで最も早期のものそれぞれ以下に挙げる。

〔丑〕「耶（爺）」

↓「東晉」王羲之「雜帖」（『全晉文』卷二十三）

：二十七日告姜。汝母子佳不。力不一。耶告。

〔IV〕「娘（孃）」

↓「唐」李延壽「南史」卷四十四「竟陵文宣王子良傳」

：武帝爲籛縣時、與裴后不諧、遣人船送后還都、已登路、子良時年小、在庭前不悅。帝謂曰、「汝何不讀書。」子良曰、「孃今何處、何用讀書。」

帝異之、即召后還縣。

〔38〕 例えは、錢謙益「少陵先生年譜」（『錢注杜詩』所收、上海古籍出版社、一九七九年）。

〔39〕 「新唐書」卷二〇一「杜甫傳」に「舉進士不中第、困長安」とある。

〔40〕 元結「喻友」に據る（『元次山文集』卷八、「四部叢刊正編」所收）。

〔41〕 『宋本杜工部集』卷一（古體詩）および卷九（近體詩）にこの時期の諸作品が收められ、「奉贈……」「贈……」「投贈……」「敬贈……」「奉寄……」などの詩題を持つものが少なくない。

〔42〕 唐代の科擧をめぐることは「省卷」「行卷」の風習があった。「省卷」とは進士科の試験の前に主試官に納める詩文のこと。「行卷」とは高官

や貴人たちに獻呈する詩文のこと。程千帆『唐代進士行卷與文學』二「行卷之風俗的由來」は、前者「省卷」の風習については、天寶元年（七四二）、禮部侍郎・韋陟によって始められたこと、後者「行卷」の風習については、進士科の試験に雜文を加えることが制度化された永隆二年（六八一）から安史の亂勃發（七五五）の間に發生したことを指摘する（上海古籍出版社、一九八〇年。日本語譯：『唐代の科擧と文學』、松岡榮志・町田隆吉「譯」、凱風社、一九八六年）。

諷諭詩「兵車行」の制作もまた「省卷」「行卷」の風習と無縁ではな

（43） 錢志熙「樂府古辭的經典的價值——魏晉至唐代表文人樂府詩的發展」に

據ると、作者名の明らかでない古い樂府詩（古樂府・樂府古辭）は唐代において經典的な價值を持つものとされた（『文學評論』一九九八年第二期所收）。

この意味でも、「古樂府」云、不聞耶娘哭子聲、但聞黃河流水一濺濺」が「木蘭詩」第二十三～四句であるとする蕭滌非論文の見解は否定されることになる。

「木蘭」の物語は民間の語りものとして杜甫の時代にも盛んに上演されていたであろう。その「木蘭」物語の中の歌辭を杜甫が「古樂府」として引用するとは考えられないのである。

さらに、「古樂府」が「木蘭詩」ではないと判斷する根據として、杜甫「兵車行」と「木蘭詩」との主題上の相違を擧げることができる。

「兵車行」が戰爭の悲惨さを訴える諷諭詩として反戰（厭戰）的感情が濃厚であるのに對して、「木蘭詩」は木蘭が出征し軍功を擧げて凱旋したという、英雄譚的色彩の強い内容となっている。

したがって、この點からも杜甫が「兵車行」自注に「木蘭詩」の措辭を引用した可能性は極めて低いと判斷される。

ただ、「木蘭」物語の唐代における流傳については依然として不明な

点も多い。特に、杜甫を始めとして元稹や白居易ら唐詩人に、「木蘭」物語およびその歌辭が如何なるものとして存在していたのか、という点については、さらなる究明が必要と考えている。別に稿を改めて論じた

(44) むろん、『宋本杜工部集』の「兵車行」に題下注があるからといって、それが杜甫自ら記した題下注と即断することはできない。しかも、第一節に記したように、「兵車行」が含まれる『宋本杜工部集』卷一の第六葉以下は宋刻ではない。

しかし、卷一の第六葉以下も、北宋期に編纂され杜集の祖型となった王洙本の系統である点を考慮に入れ、本稿ではひとまず以下のように判断する。杜甫の詩文集では原型の段階から、詩題「兵車行」の下に「古樂府云、……」なる自注が記されていた、と。

(45) 「新題樂府」という名稱は、葛曉音「論杜甫的新題樂府」に従った。『詩國高潮與盛唐文化』所收、北京大學出版社、一九九八年。初出：一九九五年。

(46) 右掲の葛曉音「論杜甫的新題樂府」は、(杜甫が「兵車行」を作った)天寶年間後期に復古的な風潮が流行していたことを指摘する。

〔追記〕

本稿は、二〇〇三年十月四日、筑波大學で開催された日本中國學會第五十五回大會の第二(古典文學)部會における口頭發表「杜甫『兵車行』と北朝民間樂府」を、改題した上でまとめたものである。

口頭發表の際には司會の富永一登氏をはじめ多くの方々から貴重な御指教を賜り、また、論文執筆の際には査読委員の方々から重要な御指摘を戴いた。ここに記して謝意を表したい。